経済建設常任委員会行政視察報告書

１．視察期間令和７年１月２０日（月）～２２日（水）

２．視察地　⑴愛知県長久手市
香流川整備計画について
⑵三重県亀山市
亀山駅前広場・道路整備について
⑶三重県松阪市
松阪市総合運動公園について

⑴ 香流川整備計画について愛知県長久手市

①視察地の選定理由

古くから河川と人類の発展には大きな関わりがあり、農業に必要な資源として、また移動・運搬手段としても河川を活用してきた。藤岡市は烏川、鏑川、鮎川、温井川、神流川、三名川、笹川といった複数の大きな河川が市内を流れており、藤岡市の歴史の中でも河川は重要な位置付けとなっている。しかし、農業従事者の減少や移動手段の変遷により、河川は多くの住民にとっては生活に欠かせない資源から災害時においては危険な要因として意識が変化している。

愛知県長久手市では、市内を流れる香流川を軸とした整備を行い、住環境と河川の調和を図っている。また、区画整理により発展した自治体であることから、河川の活用および区画整理による人口誘致の参考にしたく、今回の視察先として選定した。

②市の概要

長久手市は、面積２１．５５平方キロメートル、２０２５年1月1日時点の人口は６１，６２８人、隣接する名古屋市のベッドタウンでもあり、「日本一若いまち」と呼ばれるほど若い世代を中心に人口が増えている市である。天正年間の小牧・長久手の戦いでは、この地域で長久手の戦いが行われた。長久手市の北東に隣接する瀬戸市と共に、２００５年日本国際博覧会（愛知万博）の開催地であ

り、日本初の実用的な磁気浮上式鉄道であるリニモが運行されている。２００８年５月１日に推計人口が５万人を突破したことに伴い、２０１２年１月４日に愛知郡長久手町が市制施行した。

市域は尾張丘陵と尾張平野が接する位置にあるため複雑な地形となっている。標高は北西部が低く、南東部は高い。市域には一級河川の香流川を含む１３の河川が流れており、うち井堀川と愛知県農業総合試験場付近を源流とする北新田川が天白川水系である他は香流川に流入している。また、土地区画整理事業によりまちが発展した「区画整理のまち」でもある。

予算規模（令和６年度）

一般会計２３７億円、特別会計９１億円、企業会計２１億円（合計３４９億円）

③視察研修内容

長久手市は総面積約２，１５５ヘクタールのうち市街化区域は約７４７ヘクタール（市全域のうち３５％）であるが、市街化区域のうち区画整理事業施行面積は約６００ヘクタールであり、市街化区域のうち約８０％を区画整理による整備を行っている。名古屋市や豊田市のベッドタウンであり、日本一平均年齢が若いまちである。２００５年に愛知万博が開催された公園は、現在はジブリパークとして人気がある。

香流川整備計画は、平成２４年に研修会を開催するなど計画策定の前段階を経て、平成２６年に計画策定となった。香流川整備のコンセプトは、「水と緑・人・未来をつなぐ交流軸～香流川～」である。整備内容として、遊歩道の接続や、沿岸の公園や公共施設等を取り込み、水と緑の拠点として一体的な整備を図っている。

現在実施中の整備としては、公園西駅周辺において区画整理を行いながら整備を実施している。長久手市では、これまで組合施行による区画整理事業が主であったが、公園西駅周辺では市施行として環境配慮型のまちづくりを意識した区画整理事業を実施。商業区（４．８ヘクタール）では、商業事業者を公募し、イケア・ジャパン（株）が選定された。公園西駅周辺の整備では、近自然護岸整備、連続落差工整備、調整池上部整備等を実施し、河川との調和や土地の有効活用を図っている。護岸や河床整備の際には、生物のモニタリングを実施し、整備による生物の環境変化にも意識を向けている。

以上の説明を受けました。

④視察研修考察

長久手市に流れる香流川は住環境との調和に適した規模である河川だと感じました。河川周辺の公共施設の有効活用では、藤岡市では小平河川公園が挙げられますが、夏場は市外からも多くの人が訪れる人気の場所となるので、河川を生かした公園整備、観光客誘致、経済循環などを今後考えていければと思います。また、長久手市では市街化区域の約８割が区画整理事業による整備を実施したことから、改めて区画整理事業の重要性を認識しました。市施行と組合施行では、両方のメリット・デメリットがあるものの、藤岡市においては既に市街化が進み組合施行による施行は困難であると考えられますが、現在実施している北藤岡駅周辺地区を中心とした区画整理事業の継続、またそれに伴い景観や環境に配慮したまちづくりを行うことで、流入人口の増加やコンパクトなまちづくりが図られるのではないかと感じました。

⑵ 亀山駅前広場・道路整備について三重県亀山市

①視察地の選定理由

三重県亀山市の「亀山駅周辺２ブロック地区第一種市街地再開発事業」は、地方都市における駅周辺の再開発モデルとして全国的にも注目を集めています。かつて交通の要衝として栄えた亀山市は、人口減少や経済構造の変化に伴い、中心市街地の活気が低下していました。しかし、市と民間企業、地域住民が一体となり、都市機能の強化やにぎわいの創出を目的とした再開発事業を推進することで、新たなまちづくりの成功事例を築きつつあります。

藤岡市においても、中心市街地の活性化や駅周辺の魅力向上は喫緊の課題であり、今後の都市計画の方向性を検討する上で、他都市の先進事例を学ぶことは不可欠です。特に、公共交通の利便性向上、商業施設の活性化、市民の暮らしやすさを高める施策の実施方法については、おおいに参考になると考えました。

また、亀山市の再開発事業は、官民連携を生かした資金調達や市民の意見を取り入れた合意形成プロセスなど、多くの工夫が凝らされている点が特徴です。こうした手法を実際に視察し、現場の関係者から直接話を伺うことで、藤岡市における持続可能な都市づくりに向けた新たな視点を得ることを目的に、今回の視察地として選定しました。

②市の概要

亀山市は三重県の北部に位置し、豊かな自然と歴史に彩られた人口約４．５万人の都市です。古くから東海道の宿場町として栄え、多くの旅人が行き交う要所でした。その名残として、城跡や歴史的建造物が今も大切に保存され、市の文化と観光資源として生かされています。

交通の利便性にも優れ、東海道新幹線や名阪国道、東名阪自動車道などが通ることから、中京圏・関西圏へのアクセスが良好で、ビジネスや観光の拠点としても発展を続けています。近年では、産業振興や都市計画にも力を入れ、企業誘致や商業施設の整備を進めるとともに、環境に配慮した持続可能なまちづくりを推進。豊かな自然環境を生かした地域づくりや、防災・福祉の充実にも注力し、市民が安心して暮らせるまちを目指しています。

歴史と未来が調和する亀山市は、訪れる人にも、住む人にも、魅力あふれるまちとして成長を続けています。

予算規模（令和６年度）

一般会計２２２億円、特別会計６１億円、企業会計７４億円（合計３５７億円）

③視察研修内容

本常任委員会では、都市再開発の先進的な取組を学ぶため、三重県亀山市における「亀山駅周辺２ブロック地区第一種市街地再開発事業」の視察研修を実施しました。本事業は、老朽化した市街地の再整備を通じて、地域の活性化と持続可能なまちづくりを推進することを目的としています。

（１）再開発の経緯と目的

亀山駅周辺は、かつて宿場町としてにぎわいを見せた地域ですが、近年では都市機能の分散や人口減少の影響により、中心市街地の空洞化が進んでいました。こうした課題を解決するため、本事業では「亀山駅周辺の都市機能強化」を柱とし、商業・公共・住宅機能をバランスよく配置することで、利便性の向上と地域経済の活性化を目指しています。また、「公共交通の利便性向上」も重要なポイントとなっており、駅と市街地を結ぶ歩行者空間の整備や、バス・タクシーの乗降スペースの最適化が進められています。

（２）事業の進捗状況

現在、第一期工事が完了し、新たな公共施設の整備や駅前広場のリニューアルが実現しています。今後は、周辺の商業施設や住宅エリアの開発が進められる予定であり、「民間活力を活かした開発手法」を採用することで、官民連携による持続可能なまちづくりが展開されています。特に、民間事業者との協力によるテナント誘致や、観光資源を生かした交流拠点の整備が注目されています。

（３）市民参加の仕組み

再開発事業の成功には、市民の理解と協力が不可欠です。そのため、亀山市では、住民説明会やワークショップの実施を通じて、市民の意見を取り入れながら計画を進めています。特に、地元商店街や自治会と連携し、まちづくりの方向性を共有することで、行政主導ではなく、市民と共に創り上げる再開発を実現しています。こうした「市民と行政の連携による合意形成」の取組は、本市のまちづくりにおいても参考になるポイントです。

以上の説明を受けました。

④視察研修考察

本視察を通じて、都市再開発における計画的な進め方や市民との協力体制の重要性を改めて認識しました。

特に、「中心市街地の空洞化対策」「都市機能の強化」「公共交通の利便性向上」の３点は、本市においても重要な課題であり、亀山市のように公共施設・商業施設・住宅を一体的に整備し、官民連携を活用した持続可能な事業運営を実現する手法は、今後の本市の都市計画においても参考になります。

一方で、「事業資金の確保」については、亀山市においても大きな課題でした。国や県の補助金を活用し財政負担を軽減、長期的な収益確保を見据えた計画が進められています。本市においても、財源確保の手法や官民連携のあり方を検討することが不可欠です。

今回の視察研修を通じて、亀山市の「亀山駅周辺２ブロック地区第一種市街地再開発事業」から、持続可能な都市づくりと効果的なまちづくりの重要性を実感しました。亀山市は人口減少や中心市街地の空洞化に直面しながらも、都市機能の強化と公共交通の利便性向上を進め、地域経済の活性化を実現しています。この成功事例は、藤岡市の課題解決に役立つ貴重な指針となると思われます。

⑶ 松阪市総合運動公園について三重県松阪市

①視察地の選定理由

松阪市総合運動公園内には、スケートパークが整備されています。三重県初の公共スケートパークであり、競技エリアは日本スケートボード協会の監修により国際大会開催が可能なことから全国各地からスケーターが集まってきます。藤岡市においても西部工業団地内の貯水場の活用としてスケートボード場を整備する計画があることから、スケートパーク整備の計画から完成までの経緯及び運営について、参考とするべく視察地として選定しました。

②松阪市の概要

松阪市は、三重県のほぼ中央に位置し、東は伊勢湾、西は台高山脈と高見山地を境に奈良県に、南は多気郡、北は雲出川を隔てて津市に接しています。

地形は、西部一体が台高山脈、高見山地、紀伊山地からなる山岳地帯、中央部は丘陵地帯で東部一帯には伊勢平野が広がり、北部を雲出川、南部を櫛田川が流れています。

平成１７年に松阪市、嬉野町、三雲町、飯南町、飯高町の１市４町が合併し、新「松阪市」が誕生しました。新しい松阪市には、国内最古の土偶が出土した粥見井尻遺跡や祭祀場として知られる国指定史跡の天白遺跡などがあり、この地域が縄文時代から繁栄してきたことを物語っています。また、伊勢地方で最大の宝塚古墳の存在により、５世紀には市域を含む伊勢平野の広い範囲に影響を及ぼしていた「王」が存在していたと推測されます。奈良、平安時代には、都と東国を結び、また伊勢神宮を中心とする道路網が開かれ、参宮街道や伊勢本街道は大和をはじめとする要所と伊勢を結ぶ街道として重要な役割を果たし、この市の発展に大きな影響を与えました。

そして、天正１６年（１５８８年)、蒲生氏郷の松阪開府により、参宮街道が松阪の町中を通るようになりました。その後、松阪は江戸期を通じて和歌山街道が参宮街道と合流する交通上の要地であり宿場町として栄えました。市場庄の家並みや波瀬本陣跡は当時の賑わいをしのばせます。また、交通の要地としての利点と氏郷の商業保護のまちづくりにより、この地は江戸期を通じて商人の町として繁栄します。商人の持つ富、そして江戸や京都から得た情報と自由闊達な商人気質は、松阪商人の三井高利、国学者の本居宣長、北海道の名付け親である松浦武四郎など、世に知れた人々を輩出してきました。

予算規模（令和６年度）

一般会計７３１億円、特別会計６７９億円、企業会計３１４億円（合計１，７２４億円）

③視察研修内容

松阪市総合運動公園は、子どもからお年寄りの方まで、誰もが手軽に利用でき、スポーツを通じてコミュニケーションの場を提供する公園施設として、市民の運動・レクリエーションニーズへの対応や、自然環境の大切さを学ぶ場の創出、本格的な高齢化社会の進展に備えた健康増進や余暇活動の場の提供などを目的に現在も整備を進めています。また、広大なオープンスペースの確保により、災害時等における避難所や救援拠点としての活用など防災機能の充実も図れる公園となっています。

令和５年４月１日にキャンプ場がオープンし、すべての施設が供用を開始しました。芝生広場（約４．６ヘクタール）・多目的グランド（人工芝約１．３ヘクタール）・多目的広場（第１・第２）・スケートパーク・キャンピングパーク・遊歩道・管理事務所（会議室）・園路・駐車場・トイレ４棟などが利用可能です。

松阪市総合運動公園の建設については、「松阪市における市民の健康増進に役立てる都市公園施設の充実」という社会資本総合整備計画を策定し、社会資本整備総合交付金を活用して整備を進めました。社会資本整備総合交付金は、国土交通省所管の地方公共団体向け個別補助金を一つの交付金に原則一括し、地方公共団体にとって自由度が高く、創意工夫を生かせる総合的な交付金として、平成２２年に創設されたものです。道路、港湾、治水、下水道、海岸、都市公園、市街地整備、住宅及び住環境整備等といった政策目的を実現するため、地方公共団体が作成した社会資本総合整備計画に基づき、目標実現のための基幹的な社会資本整備事業のほか、関連する社会資本整備等を総合的・一体的に支援する交付金です。

スケートパークの経緯

・平成５～１５年度住宅団地内での公園にて夜間にスケートボードをしている人がいるため騒音等の苦情が多々発生

・平成１６年度スケートボード愛好家が「スケートパークを建設して欲しい」との請願書を松阪市議会へ提出
・平成１７～２９年度愛好家とレイアウトやルールについての協議を行う。また、平成２８年にスケートボードが２０２０年東京オリンピックの正式種目に採用が決定したことにより、国際大会の開催も可能なレイアウトに変更
・平成３０年度スケートパーク建設開始
・平成３１年度スケートパーク・オープン（平成３１年４月２日）
・令和５年度スケートパーク・リニューアル

スケートパークについて
・三重県初となる公共スケートパークは、市内のみならず、全国各地からスケーターが集まる。
・施設を安全、健全に利用できるようスケートボード専任の職員を採用。
・松阪スケートボード協会（地元団体）と、スケートパークの建設にあたり、レイアウトやルール等を計画時から綿密に協議を行い、より良いパークを造り上げた。
・競技エリアは、日本スケートボード協会の監修を受け、国際大会の開催も可能。
・より多くの方にスケートボードを始めてもらうため、月１回程度のスクールを開催。
・ナイター照明を完備し、２２時までの営業時間とすることで、仕事終わりでも利用可能となっている。

スケートパークの各エリアについて
＊競技エリア
一般社団法人日本スケートボード協会に監修依頼し、ハンドレールや多種多様なバンクやアールを擁した国際大会も開催できるセクション構成、サイズを配置した最先端のエリア
＊ローカルエリア
スラッピーカーブ、ロングレール、ピラミッドなど地元愛好者の意見を取り入れ、全国的にみても特徴あるセクション構成で、フラットスペース（平らな場所）を広く確保することで初心者スクールやイベントの開催なども可能
＊プールエリア

アメリカで発祥した水を抜いたプールで滑る競技であるパークスタイル部門のトレーニングを可能とする様々な形状の曲面を組み合わせたプールを設置したエリア

＊初心者エリア

柵で囲われたフラットスペースで初心者、子どもでも安心して楽しめるエリア

以上の説明を受けました。

④視察研修考察

スケートボード愛好家等の請願によりスケートパーク整備に至りました。スケートボードにつきものの騒音問題は、郊外の運動公園内に整備することで解消しています。ただ、市の中心部から運動公園まで距離があり、公共交通がないため、子どもたちの移動の面などの課題があります。スケートパークのレイアウトについては愛好家やコンサルタント（専門家）を交えた協議により、競技性だけでなく初心者や単に楽しみたいという人にも配慮したものとなっています。

藤岡市においても専門家の意見を聞きながら、レイアウトや運営について協議する必要性を感じました。スケートボードという「讃えあうスポーツ」を使った町おこしにつながるようなスケートパークができることを望みます。

以上の通り報告致します。

令和７年３月２５日

経済建設常任委員会

委 員 長　　針谷　賢一

副委員長　　中山　晴親

委　　員　　栗原　大輔

松田　拓也

内田裕美子

野口　　靖